

術の急速な発達や国際協力に適應するために、わが日本はその内外をとわず、新しい社会が強く要求されていることは、アメリカのそれと類似している。そのために、教育課程の編成や教育内容や新教授法や道徳教育の必要が論じられ、だんだん新しいありかたが、うちだされていく。この点もアメリカのそれに通ずるものがある。特に中学校以上の学校の内容の改善を必要とするところが非常に多い。なかでも大学入学試験の問題は学校のあり方のみならず、一般社会のあり方にも、重大な影響をおよぼしている。この意味において、コナント氏の研究報告の内容は、わが国の中学校、高校の持ち諸問題を解決することにも貴重な資料だと考えられる。数年前に読んだものではあるが、あえてここに紹介したゆえんである。一九六〇年に民主教育協会から邦訳も出ている。

(一九六四、一〇、二六日)

岸本英夫著

宗 教 学

岡 邦 俊

東京大学の宗教学教授として、日本の宗教学界の第一人者であり、更に、ハーバード大学、スタンフォード大学、シカゴ大学その他の欧米諸大学でも長らく講師として活躍された、故岸本英夫氏の最後の著述が本書「宗教学」である。氏にはこの外にも「宗教神秘主義」「宗教現象の諸相」や、「誰れでも信仰」「人間と宗教」「文化の心理」や英文「明治時代の日本宗教」の編著がある。今この最後の著作としての宗教学は、氏の苦心の作であることは勿論であるが、西欧で生れ発達した宗教学を日本人の手で、日本の視野と材料とで、みごとにまとめ上げられた宗教学としても注目すべき著述であろう。七年間にわたって十数回の手術をうけ、癌と悪戦苦闘しながら、日本の宗教学樹立のために最後まで活動をつづけられ、ついに昨年なき人となった著者の功績を想いながら、いささか本書の内

容を紹介してみた。

本書の意図について著者は「筆者自身の立場から、宗教学に、一つの体系をあたえることを志したのである。宗教学の体系化とは、別の言葉でいえば、さまざまな宗教現象を、総合網羅した、これを組織だてて、一つにまとめようとする試みである。西洋の宗教学者の学説を、そっくりそのまま借用するのではなく、自分自身の、学問の体系らしいものを立てようとする」ものであると述べている。又、この点を著者は「宗教学の体系をたてる根本的自目的は、人間生活の中における宗教の意味と役割りとを、総合的な立場から、明らかにすることである」とも述べている。このような目的を持ってなされた本書の内容を概観すれば、著者のとった学問的方法論、そして、この学問の対象としてとらえた材料の整理と云ふものが、従来の宗教学と著しく異なっていることが明となるであろう。

第一章は「宗教学の領域」となっており、ここでは、「宗教の科学的研究」「宗教学の位置」「基礎学として」の三項目が取りあげられている。「宗教学は宗教の科学的な研究を試みる学問である。特定の信仰の立場にかかわらず、文化の一面としての宗教について、基礎的な知識を得ることを目的とする」勿論宗教の科学的研究は「自然科学」的ではなく、「人文科学」的研究であり、「人間の価値もその中に含んだ文化現象を研究の対象とする」との研究方法を規定している。更にこの点について著者は「宗教には二つの研究の立場がある。(中略)一つは信仰の立場からの研究である。(中略)主観的な立場からの宗教研究である。それに対して他の一つは、客観的な立場からの研究である。(中略)あるがままの姿で観察する。価値中立的な客観的立場から研究を試みる。」宗教は一般には実践的信仰生活であるときれ、宗教の科学的、客観的研究としての宗教学の価値や意味を軽く見る人々に対して著者は、「宗教学と宗教との関係は、基礎医学と医療との関係に類似し」、「宗教の問題に悩む人があって、自分の信仰を大きな視野から再検討しようとする場合に、その基礎知識の供給源となるものは、宗教学をおいて他にない」とし、宗教学の学的存在理由を主張したのである。

第二章は「宗教をどう定義するか」で、ここでは「定義の性格」「宗教の定義の諸形態」「宗教の作業仮設の規定」の三項目がとりあげられている。「同じ宗教という言葉を用いながら、内容的には非常に性格のかけ離れたものを考えてい

る場合がすくなくない」として、宗教の定義の必要をのべている。併し、宗教の定義はその出発点においては、世間で伝統的に常識的に考えられた特定の文化現象を手がかりにするのであって、従って、宗教の定義はあくまでも「作業仮設的性格」のものであり、「宗教学の与える定義は絶対に動かすべからざるものではない」としている。宗教学的研究の進歩につれて、宗教の定義も変化し、又正確になるであろう。さて、宗教の定義は今日までおびただしい数にのぼっているがそれらを大別すると「大体三つの類型」があると著者はのべている。「第一の類型に属する定義は、神の観念を中心として宗教を規定しようとするものである」とし、神をたてるものと、神をたてない宗教が考えられるのである。神をたてる宗教の代表はキリスト教であり、神をたてない宗教の代表は仏教であると云えよう。マホメット教やゾロアスター教も亦神をたてる宗教であり、原始宗教としてのプレアニズムや、デューウィ博士等の主張するヒューマニズム的な宗教も神をたてない宗教の代表である。「第二の類型は人間の情緒的経験の上に、宗教としての特徴を見出そうとするものである。神々しさ、清浄感、神聖感、畏敬の情などは、宗教体験に伴って現れてくる特徴的な情緒経験である」として、ドイツのルドルフ、オットーのヌミノーズの意識や、シュライエルマッハの絶対憑依の感情等をあげている。第三の類型として、「人間の生活活動を中心として宗教を捉えようとする立場」をあげ、著者自身もこの第三の立場をとることを明らかにしている。いよいよ著者は作業仮設の規定として、宗教を一応次の如く定義している。

「宗教とは、人間生活の究極的な意味をあきらかにし、人間の問題の究極的な解決にかかわりをもつと、人々によって信じられているいとなみを中心とした文化現象である。」

著者は更に進んで、第三章を「宗教の基本的構造と機能」として、「人間の問題」「文化現象」「究極的」「信じられている」の四項目を、第四章「個人の場における宗教」に於て「個人的宗教の構造」「信仰体制の類型」「宗教体験」の三項目、第五章「宗教的行為の形態」に於て「宗教的行為の性格」「呪術」「宗教儀式」祈り」「布教伝道と宗教的奉仕」の五項目、第六章「信仰体制の形成」に於て信仰体制形成の方法」「修行の基礎的性格」「修行の方法」の三項目、第七章「宗教

思想の諸相」、第八章「社会の場における宗教」に於てもそれぞれ重要にして興味ある課題を多くとり上げている。(大明堂発行、菊判一五三頁 二八〇円)

玉上琢弥博士著

源氏物語評釈 第一卷

田中重太郎

たのしい本である。いままでの注釈書のやうな感じがしない、新鮮な味の評釈書である。

むづかしい源氏物語の本文に、自然になじんできまふ。そして、一ページあけると、著者独特の鑑賞の筆に魅せられて、つひつづいて何ページかを読んでしまふ。もちろん、学問的な本であるが、近づきにくくなく、読む意欲をそえられる評釈である。装幀も挿絵も上品でうつくしい。

作者の紫式部もさぞかしよこんであることであらう。「いままでずるぶんとくさん源氏の注釈や口語訳、現代語版を出してくださったけれど、これほどセンスのある本は、なかったわ」と。

二七六ページを開いてみる。

なよ竹の心ち もともとやさしい女が、心にもない態度をとる。しなやかな

竹を、男は思う。

「見る」は英語の *to see* のようなものである。女は男に顔をあわせないと、ころか姿も見せない。みすの裏に壁代かきしろがあり、その奥に屏風・几帳。男がみすに近づけばとくに気をつけて扇で顔をかくすありさまである。

これは、ははきぎ(帯木)巻の一節で、光源氏が伊予守の後妻 うつせみと